凛−雪の落しもの

蘭　藍子

雪は止んだようだった。その日はゴミ出しの日なので、少し早めに起きてゆっくり身支度をし、車椅子へと身を移した。八十歳になって乗り慣れた車の「オフホワイトのパッソ」を最後として免許も返上し、その後は暫くすると車椅子がわたしの愛車となった。

いつものように台所のシンクの下へと足を入れ、「マイハンド（鉗子）」と杖を操作しながら生ゴミをまとめ、戸口を開け外を覗いた。雪は思ったより積もっていなかったが、何かがレールにかかっているようで、戸が動かなくなった。杖の先で探ってみる。叩いてみる。箱のようなものがゴトンと音を立てたようだった。かなり重たい音だ。

やはり箱だった。そんなに小さくはない。蓋が盛り上がって来てまたゴトゴトする。生き物の臭いがする。・・・驚きと込み上げて来る嬉しさで、杖の曲がった先の方で何回も何回も引き寄せ、とうとう引っ張り上げた。

夢中で段ボールの蓋を開ける間もなく、ぷるんぷるんと体に着いた雪滴を払いながら、小刻みに震えている白い子犬が出て来た。

後先のことなど考えず、とにかく産湯。慌ててタオルで子犬の体を巻いて、わたしは有頂天になって湯たんぽの湯を桶に注ぎ子犬を漬けた。暫く体をこすり、バスタオルに包み込んでから、手あぶりのストーブを引き寄せた。子犬思ったより弱っていなかった。体が温まり乾いて来ると震えも止まり、物珍しげに車椅子とわたしの顔を見上げている。まるで雪の落としものみたいだった。

真っ黒な大きな目がまだ濡れていて、零れるように光っている。抱き上げるとわたしの手や顔を舐めて来た。生後一、二ヵ月に満たないような両の手のひらに載る子犬。しかしその存在感は凛としていた。

男の子か女の子かはよく分からないが、白くてふわふわした柔らかな生き物の感

触。腹と耳の裏だけが薄いピンク色で蒙古斑みたいな薄いシミが腹に浮き出ている。いつまで見ていても飽きない。わたしの生活はその日から一変した。

ヘルパーのK子が来て「食べるものあるの？　」といつものように冷蔵庫を開けた。わたしは子犬を凛と呼ぶことにして、今日は凛とわたしのために、パンをちぎってチーズを入れ、ミルク粥にし、ササミやブロッコリーなどの野菜をボイルして刻み込んだものがある。

K子が凛を抱き上げて、「まぁ可愛い。・・・この子メスでしょ。マルチーズが少しかか

っているみたい」と言う。いつも温かい気配りを忘れない彼女の愛情が娘のように思えて、

K子がいなくなる前に死にたいなどと彼女を困らせることがある。

それにしても、八十歳過ぎてから凛という女の子にようやくわたしは恵まれた。早速買ってやらなくては、・・・わたしははしゃいでいた。餌のドックフードやトイレにシート、赤い首輪とリード。いずれケージも要るだろう。それに玩具も。・・・わたしはウキウキしながら取り敢えず、ボロを探し出して来てウエスを作り始めた。車椅子では凛のオシッコ、ウンチなど追い掛け切れない。急いでおむつを作った。

その夜カーディガンで凛を包み、布団に入れ添いを寝した。いつも寝つきの悪いわたしだが眠剤を飲まずにすぐうとうとし出した。懐からスースー軽い寝息が上がって来て、こそばゆい気がする。夜起きて泣くんじゃないか。吠えられたらどうしよう。介護保険を受けている年金生活者が犬を飼うなんて。・・・ご近所に言われやしないか？　けれども凛は朝までワンとも言わなかった。その後も夜泣きだけはしない子だった。しきりとチュチュという舌舐めずりの音がして、わたしの胸を前足で押さえていた。子育てに人間も犬も変わりない。わたしはどんなことがあっても、この子が成犬になるまで生きて育てなくては・・・と心に決めた。

凛は日に日に成長して、二、三ヵ月経つ頃から丸いお尻を左右に振って歩く姿が艶っぽく、やはり女の子だなと思った。凛の体形は益々伸びやかに、いつもはお尻の上にドーナツのようにくるりと巻いているシッポは、全力疾走するとパラパラと解け白鷺の羽のようにひらいて飛んで行く。

一年近くなると言葉を覚えるようになった。何処へでもついて来るので、トイレ

の前で、オシッコ、待ってね。と言うと、四足をきちんと揃えて待つ。だがティッシュを箱から出して部屋中にばら撒いて遊んだり、殺虫剤をくわえて来たりするから「凛、ケージにお入り」と叱るとその素早いこと。通りがけにわたしの腿をチクッとやり返して、首輪につけた紐をくわえてケージの中に消える。

夜は八時頃まで遊んで一緒にテレビを見る。ペンギンや鳥が好きで犬猫などが出るとライバル視するのか、更に画面が変わって大物政治家が出た途端に激しく吠えたてた。

潮時と思って、凛、もうおねんねする？　と言うが早いか、紐をくわえてケージに入る。素直にケージに直行するのは大きなササミのおやつ一本貰って寝る習慣が楽しみだったのだろう。

静かになった。もう寝たかと思うと、暗がりのなかに大きな真っ黒い凛の目が二つ、じわたしをじっと見ていた。

そうこうするうち、わたしは左肩を痛めて入院加療。その間顔見知りの獣医さんに預かって貰うことになった。僅か一週間だったが帰宅すると、凛はよほど寂しかったのか、わたしのベッドの手擦りをしきりと舐めたり、ガリガリやっていた。

凛、ああちゃんとねんねしたいの？　まだ使える右の腕で凛を引っ張り上げる。その夜からわたしは凛の猛烈なベトベト総攻撃。いきなりわたしの顔を両の前足で押さえ狂ったような強烈な勢いで目から鼻、耳、口の中へと舌を入れて来て何回も執拗に繰り返す。わたしは息苦しくなって、やめてーやめてーと叫んだ。顔中が粘々して目も開けなくなって、凛の息づかいも荒く苦しそうだった。もう我慢出来なくて、彼女をベッドから遠ざけるようになった。それは不思議な凛とわたしだけの謎の秘密。・・・

凛は寝る頃になると、物足りないのか、寂しそうにしぶしぶケージに入る。しかし、その頃からわたしは凛のことでかなり思い詰めるようになって行った。

ある晩、わたしは寝返りを繰り返すうち、・・・辺りはもう寝静まって、電動車椅子に乗り換え、痛む左肩を庇いながら凛を抱き上げ膝に乗せ、右手でスイッチを入れた。レバーを引き、バックしてから徐々に速度を上げて行く。凛と散歩に来ていた公園から見晴らしのいい崖に近づくにつれ速度が増す。常夜灯のほか周囲は暗い。

突然、右手のレバーが突き出た岩石に取られ、車椅子が宙に吹っ飛び、凛の体は路肩を跳び越し同じように宙に舞った。・・・凛は体全体を透明な白いヴェールに包まれ、くるくると巻いていたシッポを白鷺の翼のように大きく広げ、空高く舞い上がった。・・・あっ、凛、待ってー。・・・わたしは、飛んで行く凛を制する自分の声で目が覚めた。

ああ、夢で良かった。・・・確かにわたしは凛が成犬になるまで育てた。が、これまでの一年のことだった。これから先、凛の将来のことを考えると、わたしと凛との暮らしに限界があることは分かっている。夢が現実にならないようにしなくては。・・・わたしは自分の思いを振り切るように、年末になり思い切って玄関扉に凛の写真と貼り紙を出した。人通りの少ない、あまり目立つ場所ではないことが、内心わたしにとって寧ろ願っていたのかもしれない。

雪のちらつくまだ正月の松が取れない夕刻だった。チャイムが鳴り、凛がけたたましく吠えた。初めて見るヒトで凛を貰いに、年が明けるのを待っていたと言う。

最初は凛も警戒していたが、よほどの犬好きで犬の扱いに慣れているのか、凛は腹を見せ、キャッ、キャッとじゃれつき、抱き上げられるとそのヒトの顔を舐め始めている。

わたしが凛のグッズを集めまとめ始めていると、そのヒトは、大事にしますから、と凛を抱きしめ、深く頭を下げた。

一年前来た時と同じように雪のなかを凛は貰われて行った。呆気ない凛との別れだった。

こんなに早く別れるなら、何故あの時彼女の気が済むようにさせてやらなかったのか。・・・その謎は、雪の日に現れ、雪の日にわたしの前から消えて行った凛。・・・

別れ際一つだけ凛が残して行った玩具。凛がよく遊んでいたカンガルーに輪のついた玩具を取り出してみた。わたしの頬に押し当てると、・・・とめどもなく涙が頬をつたっていた。

蘭　藍子

生年月日　昭和六年（一九三一）十二月十五日生まれ
八十二歳十ヵ月

略歴　青山学院大学卒　教員（東京都）転居（山口、広島）昭和六十一年退職

同人誌　安芸文学（広島）同人　文筆活動

受賞歴と著書

中国新聞社　平成二年度、平成六年度、平成七年度、随筆部門　入賞

平成七年度　第十四回中国新聞社　小説部門受賞作品「椿の墓」

広島市未来都市創造財団「文芸ひろしま」発行掲載『椿の墓』

著書　短編集『椿の墓』「文芸社」出版

『江戸最後の女　樋口一葉と渋谷三郎』「文芸社」出版

「文芸思潮」第八回『全国同人誌』評著書　準優秀賞作品

『秩父事件―森蔵コタンに死す―四国愛媛謎の偽装死』「文芸社」出版

「文芸思潮」第十回エッセイ賞　入賞

『凛―雪の落　としもの』